

ポール・ケイラスの「クモの巣」

——意識下に沈んでいた素材——

小林 信彦*

ドイツの昔話を集めていたヤーコプ・グリムとヴィルヘルム・グリムは、1815年にミュンスターの近くで「聖ペテロの母」の話を聞きました。これはドイツにしか伝わらない話ではなく、いろんな形で広くヨーロッパ中に散らばっています。その中で、ミュンスターのヴァージョンは取り立てて注目すべきものではありません。まして基本形と見なせるようなものではないのですが、ボルテとポリフカがヴァリエントを挙げて、グリムの昔話集に詳細な注記を付していますので、「聖ペテロの母」について検討をする際には、これを取り上げると何かにつけて便利です。

[死んだ]ペテロが天国に着いた時、母親がまだ煉獄にいることを知って、ひどく悲しくなりました。そこで、「主よ、母を煉獄から救い出すのを私に許して下さい」と〔神に〕願い出ました。この願いは聞き届けられました。

ペテロが母と共に我が身を煉獄から引き上げて天国へ行こうとしていますと、多くの哀れな靈魂たちは、いっしょに行こうとして、母親の衣服を掴みました。しかし母親は独り占めしようとする気持ちが強く、この靈魂たちが再び煉獄へ落ちるように、我が身を揺さぶりました。だがペテロは母親の邪悪な心に気づきました。そして、母親も放り出しました。母親は再び煉獄へ落ちて行きました。もっとまじな人間になっていないとすれば、恐らく今もそこにいることでしょう。(資料1)

他の多くのヴァージョンでは、玉葱や蕪を上から降ろして、それに掴まらせて意地悪婆さんを引き上げてやろうとします。ところがミュンスターの話では、引き上げ用具として野菜が使われず、ペテロ自身が煉獄へ降りて行って母親を連れ出そうとします。

1987年に発表した論文でフレンワイダーは一つの作品を取り上げて、「聖ペテロの母」のヴァリエントと見なそうとします。それはケイラスの「クモの巣」です。この作品はペテロどころかキリスト教圏の文学伝承とさえ何の関係もないものです。フレンワイダーの主張する通りであるとしみますと、キリスト教文化圏に拡散している話が外に飛び出して、圏外ヴァージョンができたということになります。

仏教の文献に記述されていることをヨーロッパの人々に伝えようとして、ケイラスは数多くの本を書きました。その一つが説話集『カルマ』です。これは1894年にイリノイで出版さ

*本学文学部

キーワード：ポール・ケイラス、蜘蛛の巣、ブッダが光を放つ話、聖ペテロの母

れました。この説話集の四番目にあるのが「クモの巣」という短い話です。

〔要約〕悪の限りを尽くしたカンダタは、死んだ後に地獄へ行きました。そこで恐ろしい苦しみを味っていますと、ブッダが地上に出現しました。すると、ブッダから光が出て、それが地獄の底にも達しました。ブッダはさらに、クモの巣にクモを乗せて下へ降りしました。クモの巣が地獄に達すると、カンダタはその細い糸を掴んでその上に乗りました。そして、上へ上へと登って行きました。

カンダタは突然クモの糸が震えているのに気づきました。地獄にいた外の連中が大勢いっしょに登ろうとしていたのです。カンダタは叫びました。“このクモの巣は俺のだ。お前たちは放れろ。”すると直ちにクモの巣は破れ、カンダタは再び地獄へ落ちて行きました。間違った考えを捨て切れず、ブッダの教えに従わなかったので、救われる機会を失ったのです。(資料2)

この話の前半部分で四つの出来事が連続しています。(A) ブッダが地上に出現すると光が発せられ、それが地獄にまで届きます。(B) そして、地獄にいる者たちを元気づけます。次に(C) ブッダはクモを送り出します。(D) クモの巣に乗ったカンダタは上の方へ移動して、地獄の苦しみから解放される可能性が開けます。この四つの要素を組み合わせると、ここでケイラスは文章を構成しています。これを箇条書きにすると次のようになります。

- A ブッダの光が地獄に届く。
- B 地獄にいる者たちの元気づく。
- C 代理としてクモの派遣する。
- D 地獄から脱出する可能性が開ける。

ここで語られていることは、一人のヨーロッパ人が気まぐれに思いついたことではありません。2003年に発表した画期的な論文で長尾が見事に論証しましたように、この記述は古い仏教文献に伝えられる話を踏まえています。AからDまでの展開には、仏教の伝承がよく反映されているのです。

仏教には「ブッダが光を放つ話」が伝承されています。そして、代表的な仏教説話集『アヴァダーナシャタカ』には、この話が何度も繰り返して語られます。この説話集の研究は早くも1870年代にフェールが始め、1891年には全編の翻訳を出しました。ケイラスが「クモの巣」を執筆していた1893年頃のヨーロッパには、「ブッダが光を放つ話」に手軽に接することができる状況があったのです。

さて、古い仏教の文献では、同じ文を何回も繰り返すことがよくあります。説話集『アヴァダーナシャタカ』にも、このような反復文がかなり見られ、翻訳の冒頭でフェールはそれをまとめて挙げています。その一つが「ブッダが微笑して光を放つ話」です(資料3)。光が下の方へ向かう場面に続いて上の方へ行く場面がありますが、地獄のカンダタにかかわるのは前の場面です。もう一つの仏教説話集『ディヴィヤーヴァダーナ』にも、同じ話が繰り返されています。

〔要約〕ブッダが微笑すると、(A) その口から色とりどりの光が放たれました。下に向かう光は数多くの地獄に行き渡りました。暑い地獄へ行く光は冷たくなり、寒い地獄へ行く光は暖かくなりました。すると、(B) そこにいる者たちは、地獄の苦しみに変化を感じました。(苦しみが和らぐのを覚えました。)そして、「我々は別の所に生まれ変わったのではあるまいか」と思いました。そこで、(C) ひたむきな信仰を引き起こすために、ブッダは「超能力で作りに出されたもの」を放ちました。それを見て、地獄で苦しむ者たちは思いました。「我々は生まれ変わったのではない。今まで見たこともなかった者が、その超自然力によって我々の苦しみを和らげたのだ」と考えたのです。

「超自然力で作り出されたもの」に対して心を清らかにし、地獄で受けるべき「辛い報い」が尽きまると、(D) 神々の世界や人間の世界に生まれ変わります。そして、「四つの真理」が身につきます。[こうして、「究極の真理」に到達してブッダになる可能性が開けます。] (資料4)

テキストには“光がその口から放たれ”とあり、光の発生源が「口」となっています。ここで光は口から出た言葉の比喩です。“色とりどりの光がその口から放たれ”とあるのは、「多彩な言葉を使ってブッダは真理を説く」ということです。ブッダの出現という希有の機会に、地獄で苦しんでいる連中にも真理に接する機会が与えられるのです。この光を受けると、地獄の苦しみが和らぎます。この際にブッダは“[[超自然力によって]作り出された者]を放つ”と言われます。ブッダがそうするのは、“地獄で苦しんでいる者たちに「ひたむきな信仰」を起こさせるためである”と言われます。

「[[超自然力によって]作り出された者]とは、人々に真理を伝えるためにブッダがにわかには製造した人間あるいは動物です。何しろ寸毫の違いもなくブッダの意向に添って微妙で複雑な活動をするわけですから、極めて優れた人間でも勤まることではなく、ブッダと同程度の超能力が備わっていなければなりません。それに場合によっては狭い所を通過したり超高速度で移動しなければならないこともあります。そのような人間や動物が自然界に存在するわけがありませんので、その場その場でブッダ自身が作り出して急遽の用に当てなければならぬのです。

ブッダが派遣した「[[超自然力によって]作り出された者]を見て、地獄で苦しんでいる連中は心が清らかになります。そして、地獄での苦しみが終わると、神々の世界や人間の世界に生まれ変わり、「四つの真理」を会得することができるようになります。こうして、「究極の解放」に向かって大きく一歩踏み出すことになるのです。これで遙か遠い未来にブッダになる見通しがついたわけです。

『アヴァダーナシャタカ』で繰り返して語られる「ブッダが微笑して光を放つ話」は、四つの要素から成ります。A「ブッダの放った光が地獄へ届く」、B「地獄で苦しんでいる者たちの苦しみが和らぐ」、C「ブッダが代理を地獄へ派遣する」、D「地獄にいる者たちは、天

国あるいは人間世界へ移るきっかけを得る。」これだけの要素が互いに関連し合って、一つの体系を成しているのです。

- A ブッダの放った光は地獄に届く。
- B 地獄にいる者たちの苦しみが和らぐ。
- C ブッダは代理を地獄へ派遣する。
(すると、地獄にいる者たちにブッダへの信仰が起こる。)
- D 地獄にいる者たちは天国あるいは人間世界へ移るきっかけを得る。
(そして、「究極の解放」に向かう可能性が開ける。)

ケイラスの「クモの巣」で描かれる「カンダタを地獄から救出することが企画され実行される場面」は、説話集『アヴァダーナシャタカ』で反復される「ブッダが微笑して光を放つ話」と基本的に構造が同じようです。「ブッダが微笑して光を放つ話」の ABCD は「クモの巣」の ABCD とよく対応しているように見えます。

もっとも、実際に起こった事を見ますと、問題のある箇所があります。それは D でありまして、「ブッダが微笑して光を放つ話」では「地獄にいる者たちは天国あるいは人間世界へ移るきっかけを得る。(そして、「究極の解放」に向かう可能性が開ける)」とあるのが、「クモの糸」では「地獄から脱出する可能性が開ける」とあります。どちらも「地獄を抜け出して、今の苦しみから解放される」を目指しているという限りでは同じと言えるかも知れません。しかしながら、詳しく状況を比べてみますと、二つのテキストの間には越え難いギャップが認められます。

ケイラスの「クモの巣」では、クモに会った後にカンダタはクモの巣に乗って、上へ上へと登って行きます。地獄に住む者の身でありながら、実際に地獄から脱出しようとしているのです。そして、これはブッダの意図することであったのです。このように「地獄で苦しんでいる者を救い出す」というモチーフを仏教説話で使うことはできません。「行いと報いの対応法則」によりますと、いったん何かの行いをしますと、もう取り返しがつきません。行いに相当する報いが終わるまで、打つ手は何もないのです。

『アヴァダーナシャタカ』や『ディヴィヤーヴァダーナ』の「ブッダが微笑して光を放つ話」で語られているのは、地獄にいる者たちにさえ「究極の解放」に向かう可能性が開けるということです。しかしながら、このことは「報い」の打ち切りを示唆するものではありません。一時的に地獄の極暑や極寒が和らげられることがあっても、直ちに地獄から救出されることはありません。「ブッダが微笑して光を放つ話」で言われているように、実際に「究極の解放」に向かうのは、神々の住む世界や人間の住む世界に生まれ変わった後のことです。

「光を放つ話」と「クモの巣」の間に対応が見られるのは、A から C までであり、D の対応は形だけで作者の念頭にあるのは非仏教的なものです。「クモの巣」の D は δ と記号化すべきでしょう（光を放つ話 ABCD → クモの巣 ABC δ ）。いずれにしても、「クモの巣」の

物語展開を追う限り、そういう構造をとる話が外にない以上、「ブッダが微笑して光を放つ話」が背後にあったと考えざるをえません。ところが、ケイラス自身はそのことを自覚していないのです。

1890年代の初めに、ケイラスは『ブッダの福音』を執筆していました。その頃にヨーロッパで出ていた仏教文献の翻訳のほとんどすべてを読み、その中から文を選んで体系的な文集を作ろうとしたのです。この本は『カルマ』と同じ1894年に出版されました。何しろ異文化の文献をわずかの期間に40点以上も読んだのです。これだけの数の異文化文献を短期間で読んだのですから、細かい点をすべて記憶に留めることはできません。トルストイ宛の手紙で本人も言っていますように、仏教的な考え方が記憶の中に残っても、それを特定の文献と結び付けて忘れずにいることは困難でした。それに、『カルマ』が出た年の前年には、2点の著書と4点の記事を執筆しているのです。

ケイラスの「クモの巣」はさらに話が続きます。カンダタはクモの糸に縋って上へ上へと登って行きます。突然クモの糸が震えるのに気づきます。地獄にいる仲間が大勢いっしょに登ろうとしていたのです。カンダタは叫びました。「このクモの巣は俺のだ。お前たちは放れる。」すると、直ちにクモの巣は破れ、カンダタは地獄へ落ちて行きました。間違った考えをまだ信じて、ブッダの教えを信じていなかったからです。ブッダの出現という希有の機会にせっかく遭遇しながら、カンダタは救われる機会を自ら失ったのです。

こうして、「ブッダが微笑して光を放つ話」にはない場面が「クモの巣」に加えられました。カンダタが地獄へ再落下する場面です。カンダタが再び地獄へ落ちる場面(ε)は「クモの巣」のハイライト・シーンと言えますが、これは「ブッダが光を放つ話」から受け継いだ伝承(A+B+C+D)があって始めて成り立ちえます。A+B+C+δ(+ε)という形で記号化される「クモの巣」の骨格は、仏教から継承した「ブッダが微笑して光を放つ話」を基にしてケイラス自身が考え出したものです。

このように、仏教で伝えられる「ブッダが微笑して光を放つ話」(ABCD)は、ケイラスの物語(ABCδε)に発展するわけですが、このプロセスを考える上で注目すべきは、直前のDに質的な変化があったことです。単にABCDにεが付加されて量的拡大があったに過ぎないではありません。

「ブッダが微笑して光を放つ話」の構成要素としてのD(救済の可能性が開けること)は、「究極の解放に至るきっかけを得ること」でありまして、実際に「究極の解放」に至るには、想像するだけでも気の遠くなるほどの長い時間が予定されています。

地獄で苦しんでいた者たちは、ブッダの超能力によって作り出された生物に接したお陰で、ブッダを信頼する気持ちが起こり、いつか神々の住む世界や人間の住む世界に心が移転することになります。そして、それがきっかけとなって、最後には究極的真理を会得してブッダになるように方向づけられることになったのです。

ところがケイラスの作品では、「救済の可能性が開けること」(D)がはなはだせつちかな

形をとります。カンダタの身体を今直ちに地獄から引き上げるというのです。このような成り行きは、仏教の伝承で起こりえません。すべては「行いと報いの対応法則」によって自動的に進行し、ブッダといえどもこれに干渉することはできません。「悪い行い」の「報い」として地獄で受けている苦しみは、途中で中断されることはないのです。「救済の可能性が開けること」(D) というのは、今の苦しみが終わった後の成り行きであり、今の身体が地獄から引き上げるなど、ありえることではないのです。

しかしながら、再び地獄へ落ちる場面(ε)を設定しようとすれば、仏教の伝承に反して今の身体が地獄から引き上げざるをえません。再び地獄へ落ちるという劇的な場面を設定しようとする限り、ケイラスはDを変質させて仏教の体系から逸脱せざるをえなかったのです。こうして、「ブッダが光を放つ話」を構成するABCDのうち、D(救済の可能性が開けること)が変質してδ(地獄から身体が引き上げられること)になり、これに連動してε(再び地獄へ落ちること)を付加することが可能になりました。

A+B+C+Dが仏教の古い伝承に溯るにしても、δ+εは仏教の伝承と無関係です。それどころか、仏教の体系と相容れないのです。このδ+εはABCDとは全く別の所から来たということになります。そうしますと、ケイラスがこの部分を思いついた時に、以前にどこかで聞いて記憶の底に沈んでいた「聖ペテロの母」のヴァージョンの一つに刺激された可能性は大いにありえましょう。

δ+εと非仏教的な展開を見せるとはいえ、ケイラスは仏教伝承の枠内でカンダタのめぐむる事の成り行きを語り始めています。初めて登場する場面で、カンダタは“He had been in Hell several kalpas”と紹介されているのです。一つの宇宙が発生してから消滅するまでの時間は、インド世界で1カルパと言われていまして、4320000000年に当たると言われています。それが数カルパというのですから、それだけの超長期にわたる地獄滞在がカンダタの「悪い行い」の質と量にふさわしい「辛い報い」とされているのです。しかもまだ終わったわけではありませんし、いつ終わるかも知れないのです。δ+εに見られるような極度の気ぜわしさは、仏教の伝承ではありえないことです。ブッタの放った光を浴びたからといって、すぐさま「辛い報い」から解放されるわけではありません。

なお、自作の「独創性」を誇ろうとするあまりケイラスが故意に「出典」を秘匿したというのはありそうもないことです。トルストイ宛の手紙で“〔自分が書いたことを仏典に跡付けるのは極めて困難であるが、〕まだ覚えていることは、脚注に入れておいた”と言っていますように、ケイラスは「独創性」を誇る以上に学識を誇る人です。『ブッダの福音』に見られる詳細な出典揭示は言うまでもなく、『カルマ』のような説話集でさえ、版によっては出典を示す脚注が見られることがあります(1895年の東京版)。「ブッダが微笑して光を放つ話」のことは、本当にすっかり忘れているのです。

さて、人でなしの奇人作家ロルフは奇妙な話を集めて、「トトが私に語った話」という題で、1896年に“コルヴォ男爵”の変名でロンドンの雑誌『イエロー・ブック』に発表しまし

たが、その中に「聖ペテロの母ちゃん」の話が含まれていました（資料5）。この「トトが私に語った話」が1901年に出たロルフの作品集の第4章に転載されていて、これがケイラスの目に止まりました。そして、これが自分の作品「クモの巣」に似たところがあるのに気づいて、ケイラスは1905年に一文を発表しました（資料6）。本人が初めて「聖ペテロの母」のヴァージョンに言及したのはこの時です。これは「クモの巣」が公刊されてから10年後のことでした。

この文章によりますと、「クモの巣」を執筆した際に、ケイラスは「ペテロの母」の話を意識的に素材として使ったわけではなかったようです。どこかで聞いた「聖ペテロの母」がケイラスの作った物語の一部に痕跡を残すにしても、記憶の底にあったものが無意識に浮かび出たの過ぎず、本人が意識して行った作業の結果ではないらしいのです。

ロルフの「聖ペテロの母ちゃん」を読んだケイラスは、自分の作った物語との関連について考えるよりも、壮大な感慨を覚えたのです。非キリスト教文化を知ろうと頑張ったケイラスは、人類の文化について非常に間違った考えを抱いていました。ケイラスにとりまして「人類はみな兄弟」であり、「真理は一つ」であったのです。

ケイラスの壮大な夢想の中で、太古の世界ですべては同じ源に溯ります。“もし今まで知られていなかった説話がいつか発見されて、人參の話よりも私の「クモの巣」の方がそれに近いと判明しても、私は不思議に思わないだろう”などと大まじめで言っています。ケイラスにとりましては、「聖ペテロの母」も「クモの巣」も、しょせんは同じ原型の変化形態に過ぎません。そして、自分の作品の方がヨーロッパで伝えられている民話よりも真正な状態をよく保持していると思込んでいるのです。

ケイラスが活躍していた時代に、ヨーロッパの知識人の間でマックス・ミュラーがよく読まれていました。『リグヴェーダ』に登場する神々の名前を他のインド-ヨーロッパ諸語の文献に残る神々の名前と比較して、この元気なサンスクリット学者はインド-ヨーロッパ祖語時代の神々を復元しようとしていました。そして、それを自然現象に帰したのです。インドラは雷ということになります。ケイラスはマックス・ミュラーと個人的にも親しく、その著書を2冊も刊行しているほどです（『思想科学入門』、『言語科学講義』）。

ところが、バルゲーニュの綿密な研究で明らかになったのは、最古のインド文献に描かれているのは極めて複雑な要素から成る文化であることでした。『リグヴェーダ』に記述されているのは、単純な自然神話などではなかったのです。これを他のインド-ヨーロッパ諸語で伝えられる神話と比較したところで、インド-ヨーロッパ祖語を話した人々の宗教を復元することなどできるわけがないのです。

バルゲーニュの研究は極めて専門性の高いものです。それに、スイスで事故に遭って51歳で死んだこともあって、一般向けの本を書くことはありませんでした。マックス・ミュラーと違って、知識人の間で知られることはなかったのです。ケイラスがバルゲーニュを読んだ気配はありません。

ベルゲーニュの画期的な大著『ヴェーダの宗教』が完結したのは1883年でありました。そして19世紀末になりますと、まともなサンスクリット研究者が「インド-ヨーロッパ文化」を論じることは絶えてなくなりました。20世紀になっても、ケイラスは時代遅れの幻想の中に生きていたのです。マックス・ミュラーの思いの中で、インド-ヨーロッパ諸語を話す人々の文化は一つの根源に溯る可能性がありました。ケイラスはさらに一歩進んで、あらゆる文化の中で標榜される真理は一つに収斂されると信じていました。

さて、ロルフのヴァージョンを取り上げた文章で、ケイラスは「人参が出てくる童話」に言及していますが、そこに“carrot”という語が用いられています。母親を地獄から救出するために聖ペテロが降ろしたのが人参であるというのです。ところが、ロルフのヴァージョンで救出用に使われるのは人参ではなく、多くのヴァージョンの場合と同じように玉葱です。ケイラスは何か勘違いをしているようです。

1893年のシカゴ世界宗教会議で、ヴォルコンスキーがロシア代表として挨拶して、その際に「聖ペテロの母」を紹介しています（資料7）。登場するのがペテロの母ではなく、意地悪な老婆に過ぎません。この点も含めて『カラマゾフの兄弟』で語られる話と本質的に同じですが、用いられている野菜が玉葱ではなく人参です。

ケイラスも確かに世界宗教会議に参加していました。この事実に基づいてフレンワイダーが下す結論は明快です。すなわち、“ケイラスは「聖ペテロの母」の人参版をヴォルコンスキーの挨拶を聞いて知り、「クモの巣」を構成する際に、これを基礎として使った”というのです。

“「クモの巣」は疑いなく「聖ペテロの母」のヴァージョンの一つである”といフレンワイダーは主張します。“「聖ペテロの母」を特徴づけるのは、引き上げ用具の存在である”と言い、“ぶら下がっているほかの連中を救助対象者が振り切ろうとした時に、この有効な用具が初めて機能を失う”と言うのです。ケイラスの話に登場するクモは、「聖ペテロの母」系列の話に見られる野菜（玉葱や蕪）のヴァリエーションであるということになります。

しかしながら、「聖ペテロの母」に見られる野菜と違って、ケイラスのクモは単なる引き上げ用具ではありません。口が利けるどころか、明確な職務を帯びて行動しているのです。このクモは並の生物ではなく、人々に真理を伝えるためにブッダが超自然力を用いて作り出したものです。そもそも、ブッダが光を放つ情景に始まり、地獄で苦しむ者に「究極の解放」の可能性が開けるまで、ケイラスは出来合いのパターンを使っていますので、この話の大枠にキリスト教文化圏の説話が入り込む余地は全くありません。

「聖ペテロの母」の数多いヴァージョンの中に、玉葱が使われる例ならいくつでもありますが、人参が使われる例はヴォルコンスキーが紹介する話の外にないのです。ドストイェーフスキーと同じようにペテロの母が登場しない意地悪婆さんの話をロシアのどこかで聞き、あるいは『罪と罰』を読んで知り、ヴォルコンスキーは引き上げ用の根菜の種類だけを勘違いして覚えていたのかも知れません。

ケイラスが引き上げ用具を玉葱ではなく人参と思っ込んだのは、ヴォルコンスキーの挨拶を聞いたからである可能性は確かにあります。そして、挨拶を聞いたか聞かなかったは別として、シカゴで宗教会議が開かれた1893年に、これは印刷公刊されているのです。いずれにしても、人参に対するケイラスのこだわりは強く、玉葱が出てくるラルフの話を読んでも、引き上げ用の野菜として挙げるのはもっぱら人参なのです。

しかしながら、ヴォルコンスキーの挨拶を聞いていたにしても、そしてそれに強い印象を受けたにしても、ケイラスが「クモの巣」を作った際に、何かに掴まらせてろくでなしを地獄から救出する場面を核としたわけではありません。カンダタが外の連中を追っ払う場面に先立つのは、「ブッダが光を放つ話」でありまして、これは「聖ペテロの母」とは関係がありません。そして、これこそ「クモの巣」の核にされているのです。

なお、ラルフの「聖ペテロの母ちゃん」に関連して意見を発表してから11年後の1916年に、ケイラスは読者からの手紙に応え、ドストイェーフスキーの『罪と罰』に挿入された「玉葱」に言及して意見を述べています（資料8）。ここでケイラスは“ドストイェーフスキーの物語はラルフの「聖ペテロの母ちゃん」によく似ている”と言い、“「クモの巣」を書いた時には、そのどちらも知らなかった”と言います。そして、“私の話は仏教の伝承に根差している”と強調して言い、ここでもアートマンの存在を否定する仏教の大命題について解説をしています。

ケイラスは仏教の伝承に根差す話を作ろうとしました。仏教に伝わる「ブッダが光を放つ話」に基づいて一つの物語を作ったのです。そして、その話の結びとして、カンダタが再び地獄に落ちる劇的場面を思いつきました。その結果、「ブッダが光を放つ話」を構成する4要素のうち、最後のDが変質せざるをえなくなりました。遙か遠い未来に救済される可能性を指摘する場面は、今直ちに地獄から身体が引き上げられる状況を描写する場面となりました。これを記号化すれば、Dは δ に変換されて、もう一つの要素 ϵ が加わったのです（ $|A+B+C+D| \rightarrow |A+B+C+\delta| + \epsilon$ ）。

「クモの巣」に見られる $\delta + \epsilon$ は「行いと報いの対応法則」に矛盾し、仏教の体系と相容れず、仏教の伝承を受け継ぐABCDとは別の所に由来するものです。以前にどこかで聞いた話のぼんやりした記憶によって、ケイラスの意識が刺激された可能性は大いにあります。しかしながら、ABCDの構造をとるのは仏教に伝わる「ブッダが微笑して光を放つ話」しかなく、これを基に「クモの巣」の $ABC\delta$ が作られたと考えざるをえません。それに、「クモの巣」は、仏教に馴染みのなかった人々に異文化を紹介しようとして作った作品であり、キリスト教文化圏で流布していた話を書き換えようとしたものではありません。

仏教で伝えられる「ブッダが微笑して光を放つ話」は、四つの決まった要素から成る体系を成します。そして、ケイラスの「クモの巣」はこれを受け継いでいて、要素のそれぞれが仏教で伝えられているものと対応しています。しかしながら、仏教文献に記述される「ブッダが微笑して光を放つ話」は説話ではなく、ブッダが引き起こす異常現象の可能性を示す記

述に過ぎません。名前が付いた特定の人物が登場するわけでもなければ、具体的に何か事件が起こるわけでもないのです。

「クモの巣」が「ブッダが微笑して光を放つ話」を踏まえているとは言えても、これを翻案したものではありません。それに、「ブッダが微笑して光を放つ話」をどの文献で読んだのか、作者自身はすっかり忘れているのです。特定の文献をそばに置いて、あるいは明確な形で念頭に入れて、慎重に改作作業を試みたわけではありません。仏教の伝承を受け継いでいるといっても、それは「意識下に沈んでいた素材」に過ぎないのです。

意識下にあった素材に触発されて、ケイラスは一つの物語を作りました。救出の対象となるのは、地獄で苦しんでいる者一般ではなく、カンダタという悪党です。ブッダの代理として活躍をするのは、「[ブッダの超自然力によって]作り出された者」一般ではなく、クモという具体的な小動物です。こういうことを考えたのは作者のケイラスです。

調子に乗ったケイラスは、気の向くままに仏教の伝承から逸脱して、地獄での滞在期間を勝手に中断してカンダタを救出することを思いつき、それが不首尾に終わる劇的場面を思いつきます。この際に「聖ペテロの話」に触発されたとしても、作者にはその自覚がありません。この場合も、素材あるいは触発材は意識下にあったに過ぎません。

しかも、そのように意識の底に沈んだ触発材として機能したとしても、それがかわるのは「クモの巣」の一部に過ぎず、物語を構成する5要素(ABCδε)のうち、最後の二つ(δε)に過ぎないのです。このように物語の構成から見て、フレンワイダーが「クモの巣」を「聖ペテロの母」のヴァリエーションとするのは間違いです。

「ブッダが光を放つ話」が象徴するのは、ブッダの教えに従うことの大切さです。そして、これこそ「蜘蛛の巣」全体を貫く主題なのです。カンダタが千載一遇の機会を生かせなかった理由はただ一つ、ブッダに絶対の信頼を寄せてブッダの説く真理を無条件で信じなかったからです。言い換えれば、まだ間違った考えを捨てていなかったからです。

ケイラスの「クモの巣」で、ブッダの説く真理として正面に出されているのは、「アートマンは存在しない」ということです。アートマンとはインド世界で設定された精神活動の中枢であり、正統派の宗教では不変の実体とされます。ところが、異端の仏教で強調されるのは「アートマンは存在しない」ということです。仏教の立場では、人間存在は物質要素と精神要素がたまたま仮に結合したものに過ぎず、アートマンのような不変の実体が内在するわけではありません。これは仏教体系の根幹を成す命題であり、「蜘蛛の巣」でも繰り返し述べられています。そして、このことを再確認することによって、ケイラスが作った小作品は終結します。

…………… and seized with fear he shouted loudly: “Let go the cobweb. It is mine!” At once the cobweb broke, and Kandata fell back into hell.

The illusion of self was still upon Kandata. He did not know the miraculous power of a sincere longing to rise upwards and enter the noble path of righteousness. It is thin like

a cobweb, but it will carry millions of people, and the more there are that climb it, the easier will be the efforts of every one of them. But as soon as in a man's heart the idea arises: 'This is mine; let the bliss of righteousness be mine alone, and let no one else partake of it,' the thread breaks and you fall back into your old condition of selfhood, for selfhood is damnation, and truth is bliss. What is hell? It is nothing but egotism, and Nirvāna is a life of righteousness.

“the illusion of self” とか “selfhood” とか “egotism” とかいう英語表現を使ってケイラスが読者に伝えようとしているは、「アートマンは存在する」という「間違った考え」でありまして、近代ヨーロッパ文化やそれを継承しようとする現代日本文化で好んで取り上げられる利己主義とは縁もゆかりもないものです。なお、ヴォルコンスキーのヴァージョンでも、“Leave me alone. Hands off. The carrot is mine.” となっていて、ケイラスの “Let go the cobweb. It is mine.” と表現の上で平行現象があるように見えるかもしれませんが、この方は当然ながらアートマン存在の否定などが念頭になかった人の文です。

「ブッダが光を放つ話」では、ブッダが口から発した光が地獄にも達します。この特異事象が象徴するのは、ブッダの説く真理が地獄にまで及ぶということです。そして、ブッダは急遽クモを製造して、これを自分の使いとして地獄へ派遣します。地獄滞在の即時打ち切りなどという仏教伝承に矛盾する設定があるものの、「クモの巣」の主題は「ブッダの教えを信じることの大切さ」でありまして、この限りで「クモの巣」の主旨は仏教の伝承を忠実に受け継いでいるのです。このように物語の内容と主旨から見ても、フレンワイダーが「クモの巣」を「聖ペテロの母」のヴァリエーションとするのは間違いです。

年表

- 1815年: グリムが「聖ペテロの母」を採録
- 1880年: ドストイェーフスキーが小説に「意地悪婆さんを引き上げる話」を挿入
- 1891年: フェールが「ブッダが微笑して光を放つ話」を翻訳
- 1893年: ヴォルコンスキーが人參版「意地悪婆さんを引き上げる話」を紹介
- 1894年: ケイラスが「クモの巣」を公刊
- 1896年: ロルフが「聖ペテロの母ちゃん」を雑誌に発表
- 1901年: 「聖ペテロの母ちゃん」がロルフの作品集に転載
- 1905年: ケイラスが「聖ペテロの母ちゃん」に関連して意見を発表
- 1916年: ケイラスが『カラマゾフの兄弟』の「玉葱」に関連して意見を発表
- 1918年: ボルテがポリフカと共に「聖ペテロの母」にヴァリエーション注を付加
- 1987年: フレンワイダーが「クモの巣」を「聖ペテロの母」の変形とする説を発表
- 2003年: 長尾が「クモの巣」の背後に「ブッダが光を放つ話」の存在を発見

人名

- グリム¹: Jacob Grimm (1785-1863)
 グリム²: Wilhelm Grimm (1786-1859)
 ボルテ: Johannes Bolte (1858-1937)
 フレンワイダー: Henry F. Fullenwider (今も元気でカンザスに生存中)
 ケイラス: Paul Carus (1852-1919)
 長尾: 長尾佳代子 (1967-)
 フェール: Léon Feer (1830-1902)
 マックス・ミュラー: Friedrich Max Müller (1823-1900)
 ベルゲーニユ: Abel Bergaigne (1838-1889)
 ロルフ: Frederick William Rolfe [変名 Baron Corvo] (1860-1913)
 ヴォルコンスキー: Sergej Volkonskij (1860-1937)
 ドストイェーフスキー: Fedor M. Dostoevskij (1821-1881)

文献名

- 「聖ペテロの母」: Sankt Peters Mutter
 『カルマ』: Karma
 「クモの巣」: The Spider-web
 『アヴァダーナシャタカ』: Avadānaśataka
 『ディヴィヤーヴァターナ』: Divyāvadāna
 『ブツダの福音』: The Gospel of Buddha
 「トトが私に語った話」: Stories Toto Told Me
 『イエロー・ブック』: The Yellow Book
 「聖ペテロの母ちゃん」: The Mamma of San Pietro
 ロルフの作品集: In His Own Image
 『リグヴェーダ』: Rgveda
 『思想科学入門』: Three Introductory Lectures on the Science of Thought
 『言語科学講義』: Three Lectures on the Science of Language
 『ヴェーダの宗教』: La religion vedique d'après les hymnes du Rigveda
 『カラマゾフの兄弟』: Brat' ja Karamazovy

先行研究

- J. Bolte & G. Polívka, *Anmerkungen zu den Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm 3*, Leipzig, 1918, pp. 538-542.
 H. F. Fullenwider, "The Onion and the Spiderweb: Paul Carus' *Karma* and Other Literary

Variants of Grimms' *Sankt Peters Mutter* (Bolte/Polívka, num. 221), *Fabula* 28, 1987, pp. 320-326.

長尾佳代子, 「芥川龍之介『蜘蛛の糸』原作の主題 —ポール・ケイラスが『カルマ』で言うとしたこと—」, 『仏教文学』27, 京都, 2003, pp. 161-172.

小林信彦, 「ポール・ケイラスと芥川龍之介 —ヨーロッパの仏教説話に対する日本人の反応—」, 『[桃山学院大学]国際文化論集』29, 和泉, 2003, pp. 85-138.

小林信彦, 「日本人の異文化理解 —芥川龍之介の『蜘蛛の糸をめぐる』—」, 『[桃山学院大学]ワーキング・ペーパー・シリーズ』28, 和泉, 2004.

長尾佳代子, 「創作仏教説話 Karma 誕生の背景」(立命館大学で開かれた説話・伝承学会で4月4日に口頭発表), 京都, 2005.

小林信彦, 「Sankt Peters Mutter (Bolte/Polívka 221) —非キリスト教文献に取り上げられた可能性—」, 『[桃山学院大学]ワーキング・ペーパー・シリーズ』30, 和泉, 2005.

資料1: グリムが聞いた「聖ペテロの母」(J. Bolte und G. Polívka, *Anmerkungen zu den Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm* 3, Leipzig, 1918, p. 538)

Als Petrus im Himmel ankam und sah, dass seine Mutter noch im Fegefeuer war, ward er sehr betrübt und bat: 'Lieber Herr, erlaube mir, dass ich meine Mutter aus dem Fegefeuer erlöse!' Seine Bitte ward ihm gewährt. Als nun Petrus mit seiner Mutter sich aus dem Fegefeuer erhob, um gen Himmel zu fahren, da hatten sich viel arme Seelen an seiner Mutter Rock gehängt und hofften mit herauszukommen. Die aber war neidisch und schüttelte sich, dass alle wieder herabfielen. Petrus aber erkannte daraus das böse Herz seiner Mutter und liess auch sie wieder los. Da fuhr sie wieder hinab ins Fegefeuer, wo sie noch wohl sein mag, wenn sie sich nicht gebessert hat.

資料2: ケイラスの「クモの巣」(P[aul] C[arus], "Karma, A Tale with a Moral," *The Open Court* 36.8, 1894, pp. 4217-4221)

As an illustration, I will tell you the story of the great robber Kandata who died without repentance and was reborn as a demon in hell where he suffered for his evil deeds the most terrible agonies and pains. He had been in hell several kalpas and was unable to rise out of his wretched condition when Buddha appeared upon earth and attained to the blessed state of enlightenment. At that memorable moment a ray of light fell down into hell quickening all the demons with life and hope, and the robber Kandata cried aloud: 'Oh blessed Buddha, have mercy upon me! I suffer greatly, and although I have done evil, I am anxious to walk in the noble path of righteousness. But I cannot extricate myself from the net of sorrow. Help me, O Lord; have mercy upon me!'

Now, it is the law of Karma that evil deed leads to destruction, for absolute evil is so bad that it cannot exist. Absolute evil involves impossibility of existence. But good deeds lead to life. Thus there is a final end to every deed that is done, but there is no end in the development of good deeds. The least act of goodness bears fruits containing new seeds of goodness, and they continue to grow, they nourish the soul in its weary transmigration until it reaches the final deliverance from all evil in Nirvāna. When Buddha, the Lord, heard the prayer of the demon suffering in hell, he sent down a spider on a cobweb and the spider said: 'Take hold of the web and climb up.' When the spider had again disappeared out of sight, Kāṇḍa made great efforts to climb up and he succeeded. The web was so strong that it held, and ascended higher and higher. Suddenly he felt the thread trembling and shaking, for behind him other fellow sufferers of his were beginning to climb up. Kāṇḍa became frightened. He saw the thinness of the web, and observed that it was elastic, for under the increased weight it stretched out; yet it still seemed strong enough to carry him. Kāṇḍa had heretofore only looked up; he now looked down, and saw following close upon his heels, also climbing up on the cobweb, a numberless mob of the denizens of hell. How can this thin thread bear the weight of all, he thought to himself, and seized with fear he shouted loudly: 'Let go the cobweb. It is mine!' At once the cobweb broke, and Kāṇḍa fell back into hell.

The illusion of self was still upon Kāṇḍa. He did not know the miraculous power of a sincere longing to rise upwards and enter the noble path of righteousness. It is thin like a cobweb, but it will carry millions of people, and the more there are that climb it, the easier will be the efforts of every one of them. But as soon as in a man's heart the idea arises: 'This is mine; let the bliss of righteousness be mine alone and let no one else partake of it,' and thread breaks, and you fall back into your old condition of selfhood, for selfhood is damnation and truth is bliss. What is hell? It is nothing but egotism, and Nirvāna is a life of righteousness."

資料3: 「ブツダが微笑して光を放つ話」 (*Avadānaçataka, cent légendes buddhiques*, traduites du sanskrit par Léon Feer, Annales du Musée Guimet 18, Paris, 1891. p. 10)

C'est une loi que, à l'instant où les bienheureux Buddhas font voire le sourire, des rayons bleus, jaunes, rouges, orangés, jaillissent de la bouche de Bhagavat. Les uns vont en bas, les autres en haut.

Les rayons qui vont en bas pénètrent dans les Narakas Sanjīva, Kālasūtra, Sanghāta, Raurava, Mahāraurava, Tapanā, Pratāpanā, Avīci, Arbuda, Nirarbuda, Saṭaṭa, Hahava, Huhuva, Utpalā, Padma, Mahāpadma. Alors dans les Narakas qui sont chauds, ils arrivent froids; dans les Narakas qui sont froids, ils arrivent chauds. De cette manière, les êtres qui y sont (renfermés) éprouvent un changement dans leurs souffrances, et il leur vient une pensée qu'ils se communiquent

en ces termes: Messieurs, serions-nous déchus d'ici, ou serions-nous nés ailleurs? Mais pour produire en eux la foi, Bhagavat fait un signe. Ils voient ce signe et reprennent: Non, Messieurs, nous ne sommes pas déchus d'ici, nous ne sommes pas nés ailleurs. Seulement il y a un être tel, qu'on n'en avait pas encore vu; c'est par sa puissance que cette souffrance qui caractérisait notre (condition) est interrompue. Ceux-là donc, après avoir incliné leur esprit à croire à l'occasion de ce signe, et après avoir épuisé jusqu'au bout les souffrances qui mettent fin à leur Karma, reprennent attache parmi les dieux ou les hommes (pour y renaître) et devenir des vases de vérité. (光が下に向かう場合の顛末) …………… (光が上に向かう場合の顛末)

資料 4: 「ブッダが微笑して光を放つ話」 (*Divyāvādāna*, ed. ed. E. B. Cowell & R. A. Neil, Cambridge, 1886, 4, pp. 67-68.

dharmatā khalu yasmin samaye buddhā bhagavantaḥ smitaṃ prāviṣkurvanti tasmin samaye nīlapītalohitāvadātāḥ puṣparāgapadmarāgavajravaidūryasusāragalvārkalohitakādakṣiṇāvartaśankhaśīlāpravāḍajātarūparajatavarṇā arcīṣo mukhān nīścārya kāścīd adhastād gacchanti kāścīd upariṣṭhād gacchanti | yā adhastād gacchanti tāḥ saṃjīvakālasūtrasaṃghātarauravaṃ mahārauravaṃ tapanapratāpanaṃ avīcim arbudaṃ nirarbudaṃ aṭaṭaṃ hahavahuhuvam utpalaṃ padmaṃ mahāpadmaṃ | avīciparyantān narakān gatvā ya uṣṇanarakās teṣu śītībhūtvā nipatanti ye śītanarakās teṣu śītibhūtvā nipatanti | tenānugatās teṣāṃ sattvānāṃ tasmin kṣaṇe kāraṇāviśeṣāḥ te pratiprasrabhyante | teṣāṃ evaṃ bhavanti | kiṃ nu vayaṃ bhagavanta itaś cyutā āhosvid anyatropapannā iti | teṣāṃ prasādasamjananārthaṃ bhagavāṃ nirmittaṃ darśanaṃ visarjayai | teṣāṃ nirmittaṃ drṣṭvaivaṃ bhavati | na hy eva vayaṃ bhavanta itaś cyutā nāpy anyatropapannā ity api tv ayaṃ apūrvadarśanaḥ sattvo 'syānubhāvenāsmākam kāraṇāviśeṣāḥ pratiprasrabdhā iti | te nirmite cittam abhiprasādya tan narakavedanīyam karma kṣapayitvā devamanuṣyeṣu pratisandhiṃ grhṇanti yatra satyānāṃ bhājanabhūtā bhavanti | (光が下に向かう場合の顛末) …… …… (光が上に向かう場合の顛末) [刊本の ḥ を ś に変え, sh を ṣ に変える]

資料 5: ロルフの「聖ペテロの母ちゃん」 (Corvo, “Stories Toto Told Me,” IV About Beata Beatrice and the Mamma of San Pietro, *Yellow Book* 9, London, 1896, pp. 98-101)

Ah, well, sir, you must know that the mamma of San Pietro was the meanest woman that ever lived — scraping and saving all the days of her life, and keeping San Pietro and his two sisters (the nun and the other one one, of whom I will tell you another time) for days together with nothing to eat except perhaps a few potato peelings and a cheese rind. As for acts of kindness and charity to her neighbours, I don't believe she knew what they were, though of course I am not certain; and whatever good San Pietro had in him he must have kicked up somewhere else. As

soon as he was old enough to work he become a fisherman, as you know, because when the Santissimo Salvatore wanted a Pope to govern the Church, He went down down to the seaside and chose San Pietro, because He knew that as San Pietro was a fisherman he would be just the man to bear all kinds of hardships, and to catch people's souls and take them to Paradise, just as he had been used to catch fish and take them to the market. [ローマで異教徒がキリスト教徒を大量虐殺する。一度は逃げかけたペテロは、ローマに帰って殺される。]

. And so San Pietro made no more ado but simply went straight to Heaven. And, of course, when he got there his angel gave him a new cope and a tiara and his keys, and the Padre Eterno put him to look after the gate, which is a very great honour, but only his due, because he had been of such high rank when he lived in the world. Now after he had been there a little while his mamma also left the world, and was not allowed to come into Paradise, but because of her meanness she was sent to hell. San Pietro did not like this at all, and when some of the other saints chaffed him about it he used to grow angry. At last he went to the Padre Eterno, saying that it was by no means suitable that a man of his quality should be disgraced in this way; and the Padre Eterno, Who was so good, so full of pity, and of mercy that He would do anything to oblige you if it is for the health of your soul, said He was sorry for San Pietro and He quite understood his position. He suggested that perhaps the case of San Pietro's mamma had been decided hurriedly, and He ordered her Angel Guardian to bring the book in which had been written down all the deeds of her life, good and bad.

'Now,' said the Padre Eterno, 'We will go carefully through this book and if We can find only one good deed that she has done We will add to that the merits of Our Son and of hers so that she may be delivered from eternal torments.'

Then the Angel read out of the book, and it was found that, in the whole of her life she had only done one good deed; for a poor starving beggar-woman had once asked her, for the love of God, to give her some food, and she had thrown her the top of an onion which she was peeling for her own supper.

And the Padre Eterno instructed the Angel Guardian of San Pietro's mamma to take that onion-top and to go and hold it over the pit of hell, so that if by chance she should boil up with the other damned souls to the top of that stew, she might grasp the onion-top and by it be dragged up to Heaven.

The Angel did this as he was commanded and hovered in the air over the pit of hell holding out onion-top in his hand, and the furnace flamed, and the burning souls boiled and writhed like *pasta* in a copper pot, and presently San Pietro's mamma came up thrusting out her hands in anguish, and when she saw the onion-top she gripped it, for she was a very covetous woman, and the Angel began to rise into the air carrying her up towards Heaven.

Now when the other damned souls saw that San Pietro's mamma was leaving them, they also desired to escape and they hung on to the skirts of her gown hoping to be delivered from their pain, and still the Angel rose, and San Pietro's mamma held the onion-top, and many tortured souls hung on to her skirts, and others to the feet of those, and again others on to them, and you would surely have thought that hell was going to be emptied straight away. And still the Angel rose higher and the long stream of people all hanging to the onion-top rose too, nor was the onion-top too weak to bear the strain. But when San Pietro's mamma became aware of what was going on and of the numbers who were escaping from hell along with her, she didn't like it: and, because she was a nasty selfish and cantankerous woman, she kicked and struggled, and took the onion-top in her teeth so that she might use her hands to beat off those who were hanging to her skirts. And she fought so violently that she bit through the onion-top, and tumbled back for always into hell flame.

So you see, sir, that it is sure to be to your own advantage if you are kind to other people and let them have their own way so long as they don't interfere with you.

資料6: ロルフの「聖ペテロの母ちゃん」を読んだケイラスの感想 (The Editor (Carus), "Sampietro's Mother: In Comment on Karma," *The Open Court* 19, 1905, pp. 756-758)

It is not easy to analyze an artistic composition, whether it be a poem, a story or a melody, that has grown not after a premeditated plan, but by inspiration, for in a subconscious process many phases remain concealed in the recesses of unconscious mentality. The story *Karma* is of such a nature, and the little tale of the spider's web is an echo of an ancient fairy tale about a carrot that might have saved a sour-tempered old woman from the pains of hell, had she not forfeited salvation in her meanness and envy by her desire to keep to herself the benefit of the miraculous means of escape. I have never seen the story in print, but knew only of it from hearsay.

Lately I have been so fortunate as to find a story which is practically the same except that for the carrot an onion top is substituted. It is told of the "mamma of Sampietro" and has been published in a collection of six tales printed in *The Yellow Book* in 1895 and reprinted in Frederick Baron Corvo's *In His Own Image*.

…………… [「聖ペテロの母ちゃん」の要約] ……………

I could not call this tale the source of the spider narrative, but I consider it a parallel; and the reader can easily see how an echo of a similar story has been here transformed under the influence of the Buddhist conception of the ego and the notion of "mine" resulting in selfishness. It seems to me, however, that the story is essentially Buddhistic and probably belongs to that class of folk tales which together with the story of "Barlaam and Josaphat," "Everyman," etc., have

traveled west and have been changed to suit Western conditions.

In the adaptation to Christian doctrines, the original sense of these stories has sometimes been obliterated or turned into an opposite meaning. For instance, the moral of “Everyman” clearly points out that only good deeds can save, that the ecclesiastical Brahman methods of sacrifice, of prayer, of ritual, etc., have no saving power, and yet in the well-known Christian mystery play the sacraments of the Church are reintroduced as helpful and even indispensable means of salvation. In like manner, I should not wonder at all if a Buddhist story should sometimes be found to which my tale of the spider’s web, in the reconstruction which it has received in the story “Karma,” would be of closer kin than the stories of the carrot and the onion top; for I deem my version to be not an improvement, but an actual reconstruction which particularly brings out the underlying sense that must have constituted the original meaning.

資料7:「意地悪婆さんを引き上げる話」のヴォルコンスキー版 (“Speech of Prince Serge Wolkonsky,” *The World’s Parliament of Religions*, ed. J. H. Barrows, Chicago, 1893, pp. 89-90)

There was an old woman who for many centuries suffered tortures in the flames of hell, for she had been a great sinner during her earthly life. One day she saw far away in the distance an angel taking his flight through the blue skies; and with the whole strength of her voice she called to him. The call must have been desperate, for the angel stopped in his flight, and coming down to her asked her what she wanted.

“When you reach the throne of God,” she said, “tell him that a miserable creature has suffered more than she can bear, and that she asks the Lord to be delivered from these tortures.”

The angel promised to do so and flew away. When he had transmitted the message God said: “Ask her whether she has done any good to anyone during her life.”

The old woman strained her memory in search of a good action during her sinful past, and all at once: “I’ve got one,” she joyfully exclaimed, “one day I gave a carrot to a hungry beggar.”

The angel reported the answer.

“Take a carrot,” said God to the angel, “and stretch it out to her. Let her grasp it, and if the plant is strong enough to draw her out from hell she shall be saved.”

This the angel did. The poor old woman clung to the carrot. The angel began to pull, and, lo! she began to rise! But when her body was half out of the flames she felt a weight at her feet. Another sinner was clinging to her. She kicked, but it did not help. The sinner would not let go his hold, and the angel, continuing to pull, was lifting them both. But, lo! another sinner clung to them, and then a third, and more and always more — a chain of miserable creatures hung at the old woman’s feet. The angel never ceased pulling. It did not seem to be any heavier than the small

carrot could support, and they all were lifted in the air. But the old woman suddenly took fright. Too many people were availing themselves of her last chance of salvation, and kicking and pushing those who were clinging to her, she exclaimed: "Leave me alone; hands off; the carrot is mine."

No sooner had she pronounced this word "mine" than the tiny stem broke, and all fell back to hell, and forever.

資料 8: ケイラスが『カラマゾフの兄弟』の「玉葱」に関連して述べた意見 (Paul Carus, "Dostoyevsky," *The Open Court* 30, 1916, pp. 381-384)

A reader has called my attention to Dostoyevsky's instructive little fable of "The Onion" which is found in the great Russian's novel, *The Brothers Karamazov*, and reads as follows:

..... [「玉葱」の要約]

Having myself written a little tale, the story of the spider-web, to illustrate the same idea, I naturally take an interest in all kindred expositions and come to the conclusion that this doctrine must be a very ancient inheritance of the human race, likely of a pre-Christian date. According to my version an evil-doer is suffering torture in hell, and when he calls on Buddha for succor the poor wretch cannot remember a single good deed he ever performed on earth. But the All-compassionate One, in his omniscience, recalls that once the sinner took pity on a spider crawling before him on his path and avoided stepping on it. Then the blessed Buddha allowed the spider to go to his benefactor's rescue. He spun a web from paradise to hell and bade the evil-doer take hold of it and be drawn upward out of the fiery pools. This he did; but other denizens of hell took hold of him, and the spider-web stretched but still held out. Then, in fear that it would break, he shouted, "Let go, the web is *mine*." Thereupon it broke at once, and he fell back into hell.

Dostoyevsky's story is very similar to another version of the same thought in Italian folklore, told of St. Peter's mother. It was quoted at length some time ago in *The Open Court* (Vol. XIX, 1905, pp. 756-758), and I will add here that when I wrote the story of the spider-web I was unacquainted with either the Italian or Russian version.

The origin of my story is mainly rooted in a Buddhist tradition. We read that the man who has overcome the error of selfhood says, in reply to Māra, the Evil One, the Tempter, "Naught is of *me*," Whatever other recollections may have combined to shape the spider-web episode, they were unconscious at the time I wrote the story *Karma* in which it occurs.

Hell is the thought of "I" and "me," the thought of "myself" and "mine." Liberation or salvation is gained only through an utter abandonment of all selfhood, and even if we were living in paradise, so long as we harbored the thought of self in our heart, we would be in hell. This is the Buddhist doctrine.

Religion is ultimately an all-feeling, a panpathy, a love for all that lives, and this thought is not confined to Buddhism; it is the natural faith of mankind. Primitive religion, as it existed in the prehistoric mind and lingers still in many old traditions, as in Grimm's fairy tales, and especially in "The Ancient Mariner," is much broader than we are inclined to grant. Coleridge has faithfully expressed it in the all-comprehensive declaration:

"He prayeth best who loveth best
All things both great and small;
For the dear God who loveth us,
He made and loveth all."

This religion is not mere fancy; it has existed and still exists to a great extent among the people whom we call savages, and also characterizes Dostoyevsky's story of the onion.

Dostoyevsky was naturally of an impressionable nature, and the hardships of his life served to increase the sensitiveness of his soul.

..... [翻訳者の序文からの引用]

“The Spider-web” of Paul Carus

Nobuhiko KOBAYASHI

As Kayoko Nagao (長尾佳代子) points out in her recent paper, “the Spider-web,” a short story by Paul Carus (1852-1919), is based on an episode that is repeated in such collections of Buddhist narratives as *the Avadānaśataka* and *the Divyāvadāna*.

This old episode consists of four parts: 1, Light from Buddha reaches Hell; 2, Inhabitants of Hell, bathed in Buddha’s light, are cheered; 3, Buddha sends his proxy to Hell; and 4, Those inhabitants there receive the opportunity for deliverance.

In the story of Carus, a spider is a proxy of Buddha, and an inhabitant of Hell by the name of Kandata starts climbing the spiderweb. Following the traditional story line, Carus makes his story in which the spiderweb breaks, causing Kandata to fall back into Hell because he has not followed Buddha’s teaching.